

| | |
|------------------|---|
| Title | チヨーチ・アール・ガイガー氏著 ヘンリー・チヨーチの哲学 |
| Sub Title | |
| Author | 高橋, 誠一郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1934 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.8 (1934. 8) ,p.1259(115)- 1268(124) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19340801-0115 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340801-0115 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政策は、實施の可能性はない。では Jones 説は無意味であらうか。否！ 單一關稅制を放棄して、協定關稅制を「相互原則」の上に個別的に實施する事は、資本主義世界の帝王たる合衆國にとつては、その威力の般行使をより特殊化し、より具體化することを、即ちアメリカ帝國主義が總括的示威から個別的攻撃に轉化する事を意味する。この帝國主義強化への鋪石たる任務を、Jones の著書はつとめてゐる。

デューヂ・アール・ガイガー氏著『ヘンリー・

デューヂの哲學』

高橋誠一郎

泰西社會主義思想中、我が國に紹介せらるゝことの最も早かつたものゝ一に、米國土地社會主義者ヘンリー・デューヂ(Henry George)の其れがある。彼れの名著 *Progress and Poverty*, 1879. の一部は明治二十四年に知新館から出版せられた城泉太郎編述『賦稅全廢濟世危言』中に抄譯若しくは敷衍せられた。其の翌明治二十五年四月發兌の『地租論』の劈頭に於いて、福澤先生は、地主階級の地租輕減運動に對抗するが爲めに、「吾々の宿論は速かに土地私有の事を廢し、都べて之れを政府に没入して、國民一般の共有に歸せんと欲するものなれども、凡そ事は成る丈け急變を避くるを宜しとするが故に、土地私有の談は姑く猶豫し、其の代りとして更らに地租を重くし、凡そ小作料として地主の手に入る可きものを残らず政府に取り上ぐるは目下の上策なる可し」と信する。『輓近の西洋經濟論』に就き、諸書を抄譯して、論旨の概要を示して居られる。(大正十五年版『福澤全集』第六卷三七二—六頁参照)。デューヂの *Social Problems*, 1883. は、同年、自由黨の機關『自由』新聞主筆江口三省によつて翻譯せられ、板垣退助、中江兆民の序文を附し、『社會問題』と題して、東京自由社から出版せられ、而して其の *The Irish Land Question*,

デューヂ・アール・ガイガー氏著『ヘンリー・デューヂの哲學』

一一五 (一一五九)

1881. は、同年『土地問題』と題して、角田剛一郎の手に翻譯せられ、内田老鶴圃から發行せられてゐる。而してチョーヂが一千八百九十七年十月二十九日を以つて長逝するや、明治三十一年の『社會雜誌』は「先覺ヘンリー・ジョージ」と題する追悼文を掲げて、其の経歴及び學說を述べ、「嗚呼、日本の志士、若し眞に邦家を憂ふるの心あらば、願くは、來つて、此の驚く可き大豫言者の福音に耳を傾けよ」と叫び、「我儕單稅主義の徒黨、今や其の勇士を失ひ、其の墓場に涙の雨を手向けたり。然れども、吾黨の元氣は益々之れによりて昂り、至る所に其の説を祖述して倦むことなく、全世界の民、悉く自由と爲り、一人の壓制者なきに至るまで、勉め勤めて止まざる可し。嗚呼、單稅法行はるれば、人悉く其の生産する所を得、其の汗の一と雫も皆、我が手に入る可き物の爲めに灑がれ、些少の無駄骨なるものあることなし」と結語してゐる。更らに同三十二年十二月には、彼れの主義を祖述して、十年一日の如く單稅論を主張せる米人ガルスト (Charles B. Galt)、即ち單稅太郎の遺文を小川金治の編輯した『單稅經濟學』が田口卯吉及び栗原亮一の序文、根本正の跋文と共に經濟雜誌社から出版せられた。

斯くの如く我が國に於いても、一時盛んに持てはやされたヘンリー・チョーヂは單に米國のみに止らず、世界の社會思想史及び社會運動史上に於いて重要な地位を占むるものであつて、彼れに關する論著も亦、是れ迄決して尠くはないが、最近チョーヂ研究の文献はノース・ダコタ大學准教授チョーヂ・レーマンド・ガイガー (George Raymond Geiger) 氏の『The Philosophy of Henry George, 1933.』を得て、更らに豊富と爲つた。本書は實に本文のみでも、五百六十八頁を數ふる老なるチョーヂ研究であつて、彼れの業績及び影響の總べての局面に就いて殆んど遺漏なき考察を遂げてゐる。

著者に従へば、チョーヂの對接せる問題は、人間生活の經濟的背景を變じ、是れに由つて、人間其の者を變ぜしめんとするの其れであつた。彼れは經濟學を通じて倫理學に迫らんとせるものであつた。彼れは、倫理的理想及び目的が物質的手段から二元的に分離し得ざるものであることを確信した。彼れは倫理的希望及びユートピア的豫言が、根本的に觸知し得る事物に關聯せしめられなければならぬことを認めた。理想と欲望とに適用せらるゝ底の「より高きもの」と「より低きもの」との分離は存することなくして、却つて兩者の統合が存する。(Ibid, pp. 12-13.)

著者は、一千八百三十九年九月二日フィラデルフィアに生れ、同九十七年十月二十九日、紐育市長候補として立ち、逐鹿戦半ばにして逝去するに至るまでのチョーヂの生涯を、主として其の子の著述せる傳記 (The Life of Henry George, by Henry George, Jr., 1900.) に依據して物語つた後、(pp. 19-78.) 社會問題に對するチョーヂの經濟的解決に就いて論ずる。チョーヂは、増進しつゝある富と進歩の唯中に於いて、貧困が永く存續して滅することのない經濟的遊説の解決が、課稅に依る地代の社會的徵收に存することを見定めた。貧困は富の分配に於ける諸要素、特に賃銀が地代の作用に由つて有効に溢られた經濟的疾患の症狀である。而して「單稅」は經濟的經過の流れを更らに自然なる水路に向はしめんとするの企圖である。爰に於いて乎、チョーヂは古典的、演繹的言辭を以つて、經濟科學の完全に統整せられた解釋を築き上げやうと試みたのである。(p. 101.) 彼れに在つては、經濟學は徹頭徹尾演繹的なる主題であつて、其の完全なる理解の爲めには、明朗にして公平無私なる合理的能力以外の何物をも要求するものではない。其の根本的推定は明かに自然の諸法則から引き出されたものであつて、單に哲學的努力によつて發見せらるゝを要するに過ぎざるものである。(p. 79.) 吾人は、此の點に於いて古典派經濟學に對して加へ得可き非難攻撃は應がて又、チョーヂの其れに對しても加へられ得可きものであると信ずる。

チョーヂの主張は、經濟學をして陰慘科學たらしめた二大學說、即ち賃銀基金說とマルサスの人口論とを否認す

るに始まる。次いで彼れは富、資本、土地等の名辭に就いて定義を下し、價値の概念を論じ、アダム・スミスの後繼者等がスミスの行へる「使用價値」と「交換價値」との區別を排斥せるを以つて重大なる謬見を觀た。時流の經濟學は、價値をして交換に於いて他のものを支配する財貨の力に過ぎざるものたらしめた。是れに據れば、價値は完全に相對的なるものである。然しながら、デューヂに取つては、或る絶對の測定單位のない無限に相對的なる價値の相互作用は全然不合理である。價値の相對性は總べての價値の一定源泉及び尺度に對する關係を表示する。而して這般の尺度及び源泉は、デューヂに取つては、人間的努力の要素である。人間的努力は必然總べての財貨生産に隨伴せしめられてゐる。斯くて又、價値は該物件の所持が其の所持者をして費すことを免れしめ、若しくは、アダム・スミスの語法を使用すれば、彼れをして交換に由つて「他の人民の上に課する」を得せしむ可き努力若しくは勞苦の節約に等しきものである。然るに他方に於いて、價値の勞働力に對する支配の他の源泉が存する。其の價値は斷じて「生産」若しくは「再生産」の可能性に依存することのない財貨の類型が存する。畢竟、經濟的考察上根本的要素として何等の重要性をも有せざる古畫其の他のものゝ如き單一無二の物品に附加するに、デューヂは土地の概念を以つてする。彼れに従へば、富は常に觸知し得る生産せられた物件から成る。而して資本は更らに多くの富の生産に使用せられた富である。富たらざるものは資本たることを得ない、而して究極、勞働の産物に非ざるものは資本たることを得ない。土地は勞働の所産に非ざるが故に、資本の概念から慎重に分離せられなければならぬ。(pp. 82-100)。斯くの如きデューヂの見解は固より後世經濟學者の峻烈なる批評を免れ得ざる所であつて、著者はダヴェンポート教授 (Herbert J. Davenport) の批評を擧げて之れを検討する。(pp. 100-109)。

デューヂは斯くの如く根本概念を明瞭ならしめた後、賃銀、地代、利子の法則を導入する。經濟學は、賃銀が勞働の支拂に充當せられた資本の高と支拂はる可き勞働者數との比に由つて決定せられ、利子が借手の需要と貸手によつて提供せらるゝ資本の供給との間の方程式によつて設定せられ、而して地代が耕作の限界によつて決定せらるゝことを教へる。斯くの如き分配の諸法則に對する雜駁なる進路を以つてしては、何等の統合も可能ではない。三法則の總べてを融合す可き或る一の要素、或る單位が求められなければならぬ。是れ等の法則は比例の法則であつて、其の一に於ける變化は悉く直接に他のものに影響を及ぼさなければならぬ。(pp. 109-111)。

デューヂに従へば、地代法則は實に古典的經濟學によつて誤りなく表明せられた唯一のものであるばかりでなく、それは分配の他の二法則に就いて述ぶるに資す可き單位たる可きものである。彼れはリカードの地代法則が幾何學的公理の自明性を有することを信じ、無制限に之れを承認する。而してリカードの地代法則に關するデューヂの解釋は、土地の所有は、富の生産に於ける他の重要な諸要素の所有と異なり、生産的勞働の投資なくして産物の一部を收用するの能力を意味することを看出す、蓋し、地代は單に一定不變なる土地の供給に對する、勞働及び資本の側に於ける値附けの結果に過ぎざるが故である。土地に對する報酬は勞働及び資本が生産を行ふの許可に對して支拂はざるを得ざる高であることを地代法則が明かにするとしたならば、其の系論は賃銀及び利子の法則でなければならぬ。収益は地代と賃銀と利子とを加へた高に等しい、爰に於いて乎、収益から地代を控除した高は、賃銀に利子を加へた高に等しいことになる。地代は耕作の限界に依存するものであつて、耕作の限界の降るに連れて昇り、其の昇るに連れて降る。賃銀は耕作の限界に依存するものであつて、其の降るに連れて降り、其の昇るに連れて昇る。利子は耕作の限界に依存するものであつて、其の降るに連れて降り、其の昇るに連れて昇る。(pp. 111-117)。吾人は斯くの如くデューヂによつて表明せられた分配法則の統合によつて示唆せらるゝことの多かつたも

のクラーク教授(John Bates Clark)の在つたことを忘れてはならぬ。(『三田學會雜誌』第二十六卷第十號所載拙稿「賃銀學說史上の収益説」五二七—五三六頁参照)。

デューヂは爰に其の「靜態」的研究を終つて、「動態」的研究に入り、地代をして騰貴せしむる諸力に就いて論ずる。第二は人口の増加であり、第三は生産技術改良の結果であり、第四は土地投機である。靜態學的に地代が如何にして其の創造に毫も關與することのなかつた収益の配分を吸収するかを明かにしたと考へたデューヂは、今や人口、社會組織、富の生産に於ける總べての増進は地代を増加するの結果を有したに過ぎなかつたことを指摘する。爰に於いて乎、彼れは「吾人は土地をして共同財産たらしめざる可らず」と云ふ解決に到達する。(pp. 119-130)。然しながら、デューヂの所謂「土地に於ける共同財産」は土地の共同所有を意味するものではない。デューヂは決して土地國有論者ではない。彼れの主張は經濟地代の社會化に存する。彼れの提唱する所のは、課税によつて地代を收用し、土地の價値に對するもの、外、總べての課税を廢止せんとするに在る。(p. 131)。地代を個人的終點から社會的終點に轉ぜしむるの一事は、「個人主義」に對するデューヂの熱烈なる要求と、社會的に指導せられた經濟組織に對する彼れの等しく熱心なる主張との間に必要な和解を與ふるものである。(p. 157)。

次いで著者はデューヂの先驅者及び其の思想を豫示せる者、即ちドーヴ(Patrick Edward Dove)「重農學派」、ヘンズ(Thomas Spence)「オーグメント」(William Ogilvie)「ナイラン」(Gaetano Filangieri)「米國に於ける初期の先蹤」、即ちトム・ペーン(Tom Paine)「シマンソン」(Thomas Jefferson)「エーヂ」(Edwin Burgess)及びスミス(Gerrit Smith)「二大哲」(Baruch de Spinoza)及びロック(John Locke)「ジョン・ヌチ」(Hermann)「其の他の古典的經濟學者」、シュタム(August Theodor Stamm)「サントー」(Adolph Santner)及びマンネン(Hermann)

Heinrich Gossen)等の獨逸土地改革論者に就いて述べる。(pp. 165-215)。

而して後、著者は、デューヂ自身の認むるが如く、彼れ自身の背景が其の概念の發達に取つて重要な意義を有したることを説く。勞働者が高賃銀を求めて移住し、資本が高利子を求めて流走するは、物質的進歩が猶ほ其の初期の階段に在る新たなる國々であり、又、一般的窮乏が最大なる豊富の眞唯中に於いて看出されるのは、物質的進歩が後の階段に到達した古き國々に於いてである。デューヂは嘗だに初期の桑港と其の少年時代のフィラデルフィア及び其の展開する貧困の光景に彼れを震駭せしめた紐育との比較に於いてのみならず、又カリフォルニア其の者に於ける状態の變化に於いて、斯くの如き鮮明なる對比を目的の當りまさしくと睹たのである。(pp. 215-225)。彼れの創意は或る神的默示の形態に於いて存するものではなく、寧ろ彼れの直接に經驗した諸事實から、又古典的經濟學者の先蹤から、經濟學の含蓄する總べてのものを相關せしめ、經濟學をして結局あらゆる倫理問題を解決するの用具に變形せしむ可き一體系を再建せんとする周到なる計畫の下に行はれた企圖である。(p. 225)。洵にデューヂはアダム・スミスの『國富論』中に於ける「土地の領有に先立つ初期未開の社會状態」の叙述によつて提醒せられたものであつて、之れを彼れが米國、特にカリフォルニアに於いて當面した事實に據つて論述したものと稱することを得やう。最單純なる社會状態に於ける最初の勞働者等は彼れ等自身の勞働の所産から支持せられなければならなかつた。爰に彼れの問題に對する鍵は存するのである。彼れに従へば、總べての經濟的推論が固く擱んで、決して放してはならぬ根本的眞理は、其の最もよく、發達せる形態に於ける社會は、其の最も單純なる始初に於ける社會の完成に過ぎざるものであると云ふことである。

著者は進んでデューヂと社會主義との關係を觀る。社會主義者とデューヂの學徒とは無差別なる攻撃によつて共

同被告たらしめられたとはあるであらうが、而も是れ等兩者は協力者と看做し難いものであつた。縦令ひ兩者の究竟理想は何れも更らに完全なる社會の創造であるとしても、其の主たる通路は相反する方向に走れるものであつて、唯だ孤獨の間道に於いて偶然の重合を爲すに過ぎざるものであつた。著者はデューイと英米に於ける社會主義との歴史的連接に就いて述べる。(pp. 230, 245.) 社會主義者は固より土地問題に至大の關心を有するものではあるが、而も土地獨占の害悪は彼れ等によつて斷じて他の資本家の獨占の其れと同等に考察せらるゝことがなかつた。彼れ等は地主を一の資本家として類別する、従つて又、土地の所有はあらゆる生産用具の更らに包括的なる支配の多數細別中の一に過ぎざるものである。然るにデューイは土地と資本との間に斯くの如き類同を認むるものではない。土地は經濟的要素たる等しく宇宙的要素である。人間と生命とは、土地なくんば無意味である、人間は地球の眞の一部分である。(pp. 228-258.)

著者はハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)に對し、又、制度化せられたる宗教に對するデューイの攻撃を叙した後、全世界に於ける土地の價値に對する課税の提案、並びに後の思想家、即ちトルストイ(Lyett Nikolaevich Tolstoy)、孫逸仙、第十九世紀末期及び第二十世紀初期に於ける米國自由主義者群、並びに現代の自由主義者に及ぼせるデューイの影響を論じて、其の書の第一部を終る。

デューイの著作は單に經濟論として考察せらる可きものではなくして、そは亦、倫理學に對する寄與である。著者は第二部に入つて、「經濟學と倫理學」及び「デューイの倫理的解決」に就いて述べる。貧困、富を圍繞しつゝある貧困の經濟的状況が倫理的意義を有するのは、單に、是れに由つて社會の發達——其の裡に在つて人格が發達し、倫理的判斷が生じなければならぬ社會の發達が歪曲せらるゝ爲めである。著者はデューイ教授(John Dewey)の言

を引いて云ふ、「其の科學的なることを口實として人間性に於ける最も重要な要素を無視せる名聲高き經濟學者等が存して居つた。社會的害悪に由つて感情的に激勵せられ、而して熱烈なる改善の計畫を提唱するも、而も輕々に事實を看過せる他のものが存して居つた。ヘンリー・デューイをして世界の大社會哲學者たらしむるものは、現實の事實と力とに對する洞察と、人間の生活をして生き甲斐あらしむるものに對する其の關係の承認との完全なる融合である」云。(pp. 562.)

著者ガイガー氏の期する所は、アカデミックな經濟學界及び哲學界に於いて閑却せられ若しくは排斥せられたヘンリー・デューイを道具主義(Instrumentalism)の見地に立つて再吟味し、而して其の價値を再認識せんとするに在る。實用主義(Pragmatism)に社會的觀察を加味して、道具主義の哲學を説けるシカゴ學派の中心人物たる前掲デューイ教授は、既に一千九百二十八年刊ブラウン教授(Harry Gunnison Brown)編 Significant Paragraphs from Progress and Poverty. に序して An Appreciation of Henry George. を草し、「如何なる人、如何なる高等教育施設の卒業生と雖も、彼れにして此の亞米利加大思想家の理論的寄與と或る直接の相識を有するに非ざれば、彼れ自身を社會思想に於ける教育ある人と看做すの權利を有せざるものである」と主張してゐる。(Ibid., p. 2; Geiger, p. 4.) 著者はデューイの思想を傳承して、哲學の道具の本質に關する實用主義的主張が特に社會及び經濟問題に適合するものとして之を承認し、精練する。哲學は社會問題の論述から離れて、超然として存在す可きものではない。本書の特色は、倫理的目的、人間の價値と經濟的手段との間の不可離の連結がデューイの著の基底に存することを開明せる點に存するものである。吾人も亦、經濟學及び他の社會諸科學から價値を排除するに由つて生ず可き危険を認め、「價値を有せざる事實は盲目であり、事實なき價値は空虚たる」ことを否むものではない。而して、デ

チヂの時代の經濟狀態と今日の其れとは或る點に於いて類似を有するものである。然しながら、吾人は又、倫理的觀念によつて提示せらるゝ最高頂に到達するが爲めの方法學たる彼れの經濟學は、極めて多くの矛盾撞着誤謬錯覺を有するものであることを認めなければならぬ。其の論法の直截明快と其の修辭の魅力とは何人も之れを否認することを得ないであらうが、而も其の本國は固より遠く我が日本に於いてすら多大なる影響を有して居つた彼れの經濟的解決法が、完全に半世紀を経過した後に於いて、果して如何なる程度まで其の價値を復活し得るかは疑問である。彼れは主としてスマイス及びリカードを第十九世紀後半に於ける英國社會主義に繋ぐ連鎖として社會思想史上に其の地位を有す可きものである。

伊藤秀一教授逝く

伊 東 岱 吉

昭和九年七月二十七日午前五時慶應義塾經濟學部教授伊藤秀一先生長逝せらる。

先生は本年二月初旬急性肺炎に冒され、三月二十日慶應病院に入院し、一時少康を得て五月二十日退院せられたるも、七月九日病あらたまつて再び入院せられ、約半歳にわたる病床苦闘の後、終に力盡きて永眠せらる。先生罹病の當初は輕微な風邪と思はれ、何人もその全快の速かなるを信じて疑はなかつたのであるが、流感は肺炎を併發し、肺炎は更らに執拗を極め、病勢は期待を裏切つて悪化し、終に先生を死に至らしめたのである。先生の病床に於ける半歳は洵に傷ましい限りであつた。數年來思ひを凝らされた幾多の計畫を抱き、その計畫の實現に踏み出しつゝあつた先生にとつては、徒らに病床に呻吟せられてゐることは人一倍堪へられぬところであつたらう。絶へず全快の日を胸に算へつゝ健康恢復後の計畫を楽しみにして居られた。而も容態は先生の期待を次ぎから次ぎへ無慙に破壊して行つたのである。吾々は病床に先生を訪れる毎に前日慰めた言葉が最早繰返へし得ぬことを知つて暗然とし、先生もまた泣き笑ひの表情を浮べて吾々を迎へた。病が先生に些かの余裕を與へたのは退院後の旬日に過ぎなかつた。この半年を通じて先生は爲すべき幾多の計畫を前にして焦慮し、絶へず襲ひ來る病苦と闘ひ精根盡きて